

## 韓国における道徳教育の状況について

関根明伸 (国士舘大学)

### 1. 韓国の「道徳」国家基準カリキュラム

2012年7月9日、韓国では教育科学技術部（現在の教育部）より「第2012-14号」が告示され、「総論」とともに、「国語」および「道徳」のカリキュラムの一部が改訂された「2012改訂教育課程」が発表された。ただし、前年の8月9日に改訂されたばかりの「道徳」にとっては、これは極めて異例の事であった。カリキュラムの研究・開発から告示までが、わずか1年未満で断行されたことを意味したからである。2011年末に全国で連鎖的に発生したいじめ（韓国では学校暴力という）による自殺問題が、再改訂を急がせた要因の一つだったとも言われている。

しかし、この「道徳」カリキュラム（以下、「2012年版道徳」）が注目されるのは、こうした理由からだけではない。生命倫理や情報倫理、環境倫理のような現代的課題が内容に扱われているだけでなく、日々の実践力につながる学習方法や評価方法が盛り込まれることで、「道徳」のアイデンティティーと実効性が一層追求されているからである。換言するならば、急激な韓国社会の変化やグローバル化、現代的な諸課題に対応し得る新しい「道徳」を再設計することで、40年の道徳科教育の到達点と今後の新しい方向性を示したといえるのだ。

そこで本発表では、韓国の道徳科の理念と基本的な方向性について、「2012年版道徳」を中心に整理することで、わが国への示唆点を探ることにしたい。

### 2. 「道徳」の位置づけとわが国との相違点

まず、韓国の「道徳」の位置づけを確認しておきたい。周知の通り、わが国の「道徳」（小1～中3）は教科外の「領域」となっているが、韓国の「道徳」（初3～中3）は、他教科と全く同格の扱いとなっている。よって、わが国の「道徳」との相違点は、一般の教科が有する性格や運営方法との差異として現れている。例えば、初等学校では学級担任が授業を担当するが、中学校では「道徳」の教員免許状を持つ教科担任が担う。教科書（初等は国定、中等は検定）の使用や成績の評価も他の一般教科と全く同様に行われているのだ。

しかし、「道徳」が学校教育で担っている目的と役割に着目するならば、そもそも両者に大差はない。韓国でも「道徳」は「様々な学校活動との連携」されるだけでなく、人性教育（韓国では広義の道徳教育を人性教育という）は全ての教育活動で実施されている。また、教科や授業「時間」が「教育活動全体を通じて」行う道徳教育の中心的な役割を担っ

ている点も同様である。わが国の「道德の時間」が全教育活動の「要」であるように、韓国の「道德」は「人性教育の主幹教科であり核心教科」とされているのだ。

だとするならば、「道德」の本質的な特徴とわが国との相違点はどこに見出せるのか。言う間でもなく、それは、「道德」の統一的な内容と基準を示している国家基準のカリキュラムである。具体的には、「2012年版道德」が示す、目標、内容、方法、評価の在り方である。

### 3. 韓国「道德」カリキュラムの目標と内容

#### (1) 「道德」の目標

まず、目標を見てみよう。最終的な教科の目標は「自律的で統合的な人格」の形成にある。ただし、その目標達成のために、韓国の「道德」では、多角的で総合的な学習が前提とされている点に特徴がある。「道德」の初・中学校共通の総括的目標は次の通りである。

##### 韓国「道德」の総括的目標

自分と、私たち・他の人、社会・国家・地球共同体、自然・超越的な存在との関係に関する正しい理解をもとに人間の生に必要な道德的規範と礼節を学ぶとともに、生の多様な領域で発生する道德問題に対する感性を育成し、道德的思考力と判断力、道德的情緒、実践意思および能力を通じて道德的徳性を涵養し、これをもとに自律的で統合的な人格を形成する。

教育科学技術部『道德科教育』p. 5（筆者訳）

まず、①「自分」、②「私たち・他の人」、③「社会・国家・地球共同体」、④「自然・超越的な存在」という、「私」と価値関係性のある四領域が設定され、その理解のもとに、「生に必要な道德的規範と礼節」の学びが求められていることが分かる。つまり、韓国の「道德」では最初に道德的知識の学習が要請されているのだ。わが国では、「道德的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道德性を養うこと」が道德教育の目標とされており、知識には特に触れてない点で対照的といえる。

ただし、学習は知識のレベルに留まるわけではない。次の段階では、「道德問題」の課題解決をしていく過程において、道德的思考力や判断力、道德的情緒、実践意思・実践力等も同時に学習されていくことになっている。つまり、「道德」では、認知的側面、情意的側面、行動的側面という各側面からの多角的な学習と問題解決的な追究をさせることにより、教科の目標を達成しようとしているのである。

#### (2) 「道德」の内容

##### ①価値関係性拡大法にもとづく内容項目の設定

次に内容について見てみよう。内容の構成は、一見するとわが国の「道德」と非常に近い。例えば、内容領域の捉え方と内容項目の整理の仕方は非常に似ている。わが国の「道德」では、児童・生徒の道德性を、①「主として自分自身に関すること」、②「主として他

の人とのかかわりに関すること」、③「主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」、④「主として集団や社会とかかわりに関すること」という四つの視点からとらえ、その視点から「第1学年及び第2学年」で16個、「第3学年及び第4学年」で18個、「第5学年及び第6学年」で22個、中学校で24個の内容項目が2学年ずつに分けて分類整理されている。一方、韓国では、「私」との価値関係性の拡大に沿って、①「自分」、②「私たち・他の人」、③「社会・国家・地球共同体」、④「自然・超越的な存在」という四つの領域が設定され、その各領域から抽出された内容項目が、初等3～4学年で16個、同5～6学年で16個、中学校1～3学年で30個が示されている。なお、これら四つの領域はカリキュラム上のスコープを表すとともに、内容項目の配列はシーケンスを形成している。

## ②到達度基準による内容の提示

しかし、内容項目が達成すべき到達基準を示している点は、わが国のカリキュラムとの大きな相違点である。ここで、初等学校5～6年の「対話と葛藤（争い）の解決」という内容項目を見てみよう。

「対話と葛藤（争い）の解決」の内容項目（初等5～6年）

### （1）私たち・他の人との関係

（ 中略 ）

#### （エ）対話と葛藤（争い）の解決

日常生活で発生する様々な葛藤の原因と対話の重要性を認識し、様々な葛藤について対話を通じて平和的に解決できる道徳的力量と態度を育てる。そのために日常生活の様々な葛藤の問題を対話で平和的に解決した場合とそうでない場合の長所・短所を分析し、平和的な葛藤の解決方法について事例を具体的に提示する。

- ①葛藤の種類と葛藤解決の意味と重要性
- ②対話を通じた平和的な葛藤解決の方法と過程および手順
- ③暴力のない学校、学級規則を作る

教育科学技術部『道徳科教育課程』P. 16（筆者訳）

ここでは、「道徳」で学習する内容が獲得すべき学習要素の到達基準（韓国では成就基準（achievement standards）という）で示されていることが分かる。例えば、「葛藤の原因と対話の重要性」等は知識理解での到達基準であり、「分析」や「事例を具体的に提示する」等は、行動における到達基準を表している。

一方、わが国の「道徳」ではどうだろうか。これに近い内容項目に、例えば、「主として他の人との関わりに関すること」の「(4) 謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする。」(5, 6年)がある。この中で注目したいのは、「謙虚な心」や「広い心」という表現は解釈の幅が広く、定義する事自体がやや困難な言葉である点である。また、「意見や立場を大切にする」とは具体的にはどういう行為や行動を指すのか、指標が明

確に示されているとは言い難いものとなっている。項目は、期待される姿勢や態度・行動としての「願い」にも近い表現と言えるだろう。

しかし、韓国の場合には、追究すべき道徳的な知識、心情、行動等が、道徳的能力や道徳性、道徳的態度の如何（いか）なる行動に現れるべきなのか、具体的な到達度のかたちで提示されている。つまり、当該項目が、学習場面で如何（いか）なる目的や意味を持ち、道徳的能力や道徳性が如何（いか）なる態度や行動に現れて「できるように」なるべきなのかが示されているのだ。こうした表記の仕方は、学習の行動目標を明確にさせるだけでなく、評価の際の具体的な基準を示すことにもつながっていくだろう。道徳性発達の度合いの把握や指導をしやすくする意味でも有効な手段の一つである。

### ③現代的課題および学際的内容を含む教科内容

次に、全体の内容について見てみよう。表1および表2は、初等学校および中学校「道徳」の内容体系である。

表1 韓国の初等学校「道徳」の内容体系

領域	主要価値・徳目		3・4学年	5・6学年
	全体志向	領域別		
道徳的主体としての私	尊重 責任 正義 配慮	自律 誠実 節制	(ア) 大切な私 (イ) 自分の事を自ら行う生活 (ウ) 誠実な生活 (エ) 反省する生活	(ア) 感情の管理と表現 (イ) 自分の行動に対する責任感 (ウ) 誇りと自己啓発 (エ) 節制する生活
私たち・他の人・社会との関係		孝道 礼節 協同	(ア) あたたかい家庭 (イ) 友達との友情と礼節 (ウ) 感謝する生活 (エ) 近隣との道理と礼節 (オ) インターネットのマナー (カ) 互いに助け合う生活	(ア) 情報社会での正しい生活 (イ) 目上の人に対する礼節 (ウ) 配慮し奉仕する生活 (エ) 対話と葛藤の解決
社会・国家・地球共同体との関係		遵法 公益 愛国心 統一意思 人類愛	(ア) 公共の場所の秩序と規則 (イ) 国に対する愛と誇り (ウ) 統一の必要性和統一への努力 (エ) 多文化社会での望ましい生※	(ア) 人権の尊重と保護 (イ) 法と規則の遵守 (ウ) 共同体意識と市民の役割 (エ) 公正な行動 (オ) 私たちが追求する統一の姿 (カ) 地球村時代の人類愛
自然・超越的存在との関係		自然愛 生命尊重 平和	(ア) 生命の尊さ (イ) 自然愛と環境保護※	(ア) 真のすばらしさ (イ) 愛と慈悲

教育科学技術部告示第 2012-11 号[別冊 6]『道徳科教育課程』、6 頁。(筆者訳)

表2 韓国の中学校「道徳」の内容体系

領域	主要価値・徳目		中学校 1～3 学年群
	全体志向	領域別	
道徳的主体としての私	尊重 責任 正義 配慮	自律 誠実 節制	(ア) 道徳の意味 (イ) 生の目的と道徳 (ウ) 道徳的省察 (エ) 道徳的実践 (オ) 人間存在の特性 (カ) 自律と道徳 (キ) 道徳的自我性 (ク) 勉強と進路 (ケ) 道徳的探究
私たち・他の人・社会との関係		孝道 礼節 協同	(ア) 家庭生活と道徳 (イ) 友人関係と道徳 (ウ) サイバー倫理とマナー (エ) 近隣に対する配慮と相互協同 (オ) 他の人を尊重する態度 (カ) 平和的解決と暴力の予防 (キ) 青少年文化と倫理
社会・国家・地球共同体との関係		遵法 公益 愛国心 統一 意思 人類愛	(ア) 人間の尊厳性と人権 (イ) 文化の多様性と道徳※ (ウ) 分断の背景と統一の必要性 (エ) 望ましい統一の姿 (オ) 社会正義と道徳 (カ) 個人の道徳的生と国家の関係 (キ) 国家の構成としての望ましい姿勢 (ク) グローバル化時代の我々の課題
自然・超越的存在との関係		自然愛 生命尊重 平和	(ア) 環境親和的な生 (イ) 生の大切さと道徳 (ウ) 科学技術と道徳 (エ) 文化と道徳 (オ) 心の平和と道徳的生 (カ) 理想的な人間と社会

教育科学技術部告示第 2012-11 号[別冊 6]『道徳科教育課程』、7 頁。(筆者訳)

特徴の第一は、読み物教材や文献資料などを通じて道徳的な自覚を促すような従来型の内容だけでなく、現代的で現実的なテーマが多く登場している点である。例えば、初等 3・4 年の「インターネットのマナー」、初等 5・6 年の「情報社会での正しい生活」、中学校の「平和的解決と暴力の予防」などは、いずれも実際生活の中で子供が直面する(であろう)身近な現代的・現実的な課題である。

第二に、様々な学問分野から学際的に追究していくべき内容が含まれている。特に中学校ではその傾向が強い。例えば「道徳の意味」「道徳的自我性」などのような哲学的、心理学的な課題だけでなく、「勉強と進路」や「環境親和的な生」、「グローバル時代の我々の課題」のように、キャリア教育や環境教育、国際理解教育など、複合的なテーマに対して多角的な視点から総合的に学習し、考えさせていく課題が扱われている。「道徳」が多面的かつ横断的に学ぶべき総合的な教科であることが理解される。

#### 4. 教科書にみられる「道徳」の教育方法

では、教育の方法はどうか。ここでは2013年3月発行の教科書『道徳5』の「3. 葛藤を対話で解決する生」p.46～65)を例に検討してみよう。この単元は次の三つの小単元の展開で構成されている。

##### (1) 教科書の単元展開

①「葛藤とその解決、正しく知ること」： - 主に認知的な学習 -

最初の小単元は葛藤に関する認知的な学習が中心となっている。まず、「①心を開く」では、教室の子供たちが争う絵を見せて考えさせ、問題提起をする。「②一緒に調べましょう」では葛藤の種類と対話の重要性の知識理解のための調べ活動を促す。「③心をみがきましょう」では穴埋め問題を課すことで「対話」の重要性を再確認させる。

②「葛藤を対話で解決する」： - 主に情意的な学習と解決方法の探究 -

次は、情意的な学習と探究活動が中心となっている。「①心を開く」ではけんかの場面の絵を見せて過去を省察させ、原因と解決方法を熟考させる。「②正しく判断してみましょう」では、解決のための対話の方法が説明される。また、吹き出しにセリフを入れさせ、適切な言葉使いを考えさせる。「③心を磨いてみましょう」では、対話で問題を解決した地方自治体の感動的な読み物教材が登場する。

③「葛藤を一緒に解決する」： - 主にまとめと実践 -

最後は、単元のまとめと実践活動である。「①心を開く」では読み物教材を読ませ、解決方法を問いかける。「②さらに深く探究してみましょう」では、第三者の仲裁で解決を図るための方法や手順が説明される。「③心を磨いてみましょう」では読み物教材が登場し、続いて、「④生活の中で実践してみましょう」では実生活での「仲裁」の実践を呼びかける。「⑤学んだことを整理しましょう」「⑥心にとどめておきましょう」「⑦さらに学んでみましょう」で単元全体を振り返り、整理し、実践意欲を高めて閉じている。

##### (2) 「道徳」の教育方法の特徴

教育方法の特徴は、まず、テーマについて多角的で総合的に接近する学習展開となっている点にある。小単元や下位項目は、主として、①道徳的知識や判断力等に関する認知的な学習、②道徳的感情や意志・態度に関する情意的な学習、③道徳の実践力や習慣に関する行動的な学習のいずれかのまとまりになっている。これらの多角的な学習が重層的に反復しながら展開されることで、大単元のテーマが追究されるように構成されているのだ。

第二に、展開方法は一様ではなく、単元の目的と内容に応じて多様な技法や手法の活用が推奨されている点である。教科書の展開は上記の通りだが、『教師用指導書』では、講義や説話、ディスカッション、モラルジレンマ学習、ロールプレイング、ICT活動、そしてプロジェクト学習やボランティア活動など、様々な技法の選択的な活用が示唆されている。教科書を基本としながらも、各学校や児童・生徒、地域性を考慮した様々な授業方法の活用と工夫が、指導する教員に一任されている。

第三に、実効性が強く意識されている。吹き出しへの「セリフ」の記入や仲裁方法の学習など、教材内容と実際の生活を相互に関連させて現実感を持たせるための工夫がみられる。認知的な学力と心情的な学びを如何（いか）に生活の実践力に結び付けるのか、そのためのスキル学習やマニュアルの学習も道德教育の一つの方法として積極的に取り込まれている。

## 5. 「道德」の評価方法

### (1) 到達基準と評価基準の設定による評価

評価は、初等学校では数値化または記述式で行われ、中学校では数値化で行われている。ただし、その目的は個人の判定や評定ではなく、あくまでも道德性の発達の把握と指導・学習方法の改善にある。したがって、評価活動は学習到達度の分析に主眼が置かれ、一般的に、①価値・徳目の明確化→②到達基準の確認と設定→③評価基準の設定→④等級化という手順と内容で実施されている。例えば、前述の単元ならば、①「尊重」「礼節」の明確化→②「葛藤の二面性を理解し、葛藤を民主的な対話を通じて平和的に解決する意思をもつ」の設定→③「二面性を理解」し「説明できる」か。「対話の解決しようとする意志があり」、そして「努力している」か。→④数値化となろう。表3は、この単元における到達基準と評価基準の例である。

表3 「葛藤（争い）を対話で解決する生」の到達基準および評価基準

到達基準	評価基準		評価方法	評価時期
・葛藤の意味と重要性を理解し、対話を通じて葛藤を解決しようとする心をもつ。	上	葛藤の意味と対話の重要性を説明することができるとともに、対話を通じて葛藤を解決しようとして一生懸命に努力している。	・観察評価 ・『生活の手引き』課題提出物の評価	・授業中および授業後
	中	葛藤の意味と対話の重要性を説明することができるが、対話を通じて葛藤を解決しようとする努力は不足している。		
	下	葛藤の意味と対話の重要性を説明することができず、対話を通じて葛藤を解決しようとする努力も不足している。		

「T-シェルパ」 <http://e.tsherpa.co.kr/> サイト資料より

## (2)「道徳」の評価の特徴

第一に、当然ながら評価は「2012年版道徳」に準拠して行われている。等級化には評価基準が指針となるが、そのためには到達基準の明確化が前提となる。さらに、その到達基準の設定には内容の明確化と適切な方法が必要とされなければならない。このように、目標、内容、方法に準拠した一貫性のある評価を実施することで、道徳性の発達の把握と指導法の改善に資する有意味な評価が目指されている。

第二に、学習の到達度は基本的に行動の変容を指標に測定されている。ただし、評価基準は「内容+行動」で示されており、行動の変容は関連の内容とセットとなっている。例えば、前述の単元ならば、「葛藤の二面性の理解」と「説明すること」がセットであり、説明できることが理解していることの判断基準となる。

第三に、認知的、情意的、行動的側面の三つの側面から総合的に評価されている。道徳的知識を問う筆記評価や、パフォーマンス評価としての行動観察や口述・論述評価、討論、発表、成長の過程や度合を評価するポートフォリオ、自己評価や他者との相互評価など、多角的で総合的な観点から多様な方法、技法、道具を組み合わせ、客観性や信頼性、妥当性を高めようとしている。なお、評価道具をはじめ、読み物教材や動画などの関連教材や評価基準は、「T-シェルパ」や「i-scream」等の有・無料の民間のインターネットのサイトでも数多く提供されており、多くの教師が適切に加工しながら活用している。

## 6. わが国への示唆

以上より、韓国の道徳科から示唆される点は以下の通りである。

第一に、教育内容に現代的な課題を取り入れることである。「いじめ問題」のような児童・生徒が直面するような切実な課題は言うまでもないが、生命倫理や情報倫理、環境倫理などのような現代的、学際的な課題も発達段階に応じて取り入れることで、生活実態や社会の変化に対応し、発達段階に沿った実効性のある道徳教育へと転換することが望ましい。

第二に、学習指導要領の内容項目を到達基準の表現にすることである。「道徳」の評価が簡単でないのは言うに及ばない。しかし、可能な限り内容項目を到達基準のかたちで設定するのならば、学習活動の指標や目標が明確になるだけでなく、教師は指導や評価がしやすくなり、ひいては道徳的実践力の向上につながっていくのではないか。

第三に、学習指導要領の目標、内容、方法、評価を一体的に再構成することである。目標に準拠した到達基準としての内容項目を設定し、さらに評価基準に沿った指導と評価の方法に一貫性が担保されれば、評価の妥当性と信頼性は高まっていく。継続的な成長過程の把握と指導法の改善を進めるためにも、カリキュラムの一体的な構造化が望まれる。

第四に、認知的側面、情意的側面、行動的側面からの多様な授業方法と多角的な評価方法を取り入れることである。現代の子供たちが直面する道徳な課題は、複合的で複雑な要

素が絡み合っているのが普通であり、課題解決には多様な接近方法とそのため能力が必要とされる。どれか一つに偏ることなく、バランスのとれた道德性の育成が望まれるのだ。したがって、上記の三側面に沿った指導方法と評価方法の導入は、全人的な道德性の発達を促すことにつながっていくと考える。

最後に、大学の研究者養成や教員養成に関する整備の必要性である。冒頭でも述べたが、「2012年版道德」は韓国の道德科40年の研究・実践の到達点である。もちろん、現在の「道德」が完成体であるはずがなく、未だ発展途上にあるのは言うまでもない。しかし、このカリキュラムが提起したのは、単なる小手先の変更や改善ではなく、現代の社会が求めている「道德」という教科の一つの「かたち」であり可能性である。そして、継続的にこの教科の存在を支えてきた周辺の法制度やシステムの重要性でもある。

今後、道德教育を充実・発展させていくためには、わが国の実情に合ったカリキュラムの開発とともに、それを支えていく教科教育学的な研究体制と法制度や行政による包括的な条件整備が必要不可欠である。「道德」の教科化を契機に、今後の論議の高まりを期待したい。

#### 参考文献

教育科学技術部（2012）『道德科教育課程』

教育科学技術部（2011）『初等学校道德5 教師用指導書』

「T-シェルパ」サイト <https://www.tsherpa.co.kr/>

「i-scream」サイト <http://www.i-scream.co.kr/>